【特別支援教育】

生徒の多様なニーズに応じる総合的な学習の時間
～地域の警察との交流活動を通した安全指導の実践～

浜崎真理子・宮﨑　紀雅・奈良井　正

1　はじめに

本校の特別支援教育においては，生徒の自己実現と自立・社会参加を目指してきた。「障害のある者とない者が同じ社会に生きる人間としてお互いを正しく理解し，共に助け合い，支え合って生きていく」ことを念頭におきながら，「障害のある児童生徒が地域社会の一員として，生涯にわたって様々な人と交流し，主体的に社会参加しながら心豊かに生きていくこと」を目指している。

養護学級では，これまでに外部講師の方と共に学習活動に取り組んできた。専門的な技術や知識だけでなく，それに携わる方々の「心」や「背景」にも目を向けてきた。今年度は生徒の内面から生まれてくるニーズに対応した自立・社会参加に結びつく交流活動に取り組むことにした。

最近の社会事情，とりわけ児童生徒をとりまく環境の変化はめまぐるしく変化してきている。特に最近では児童や生徒が事故や犯罪の犠牲になるケースが目につく，特別支援教育にかかわる生徒にとっても，それは別の世界のことではなくなってきている。本校の生徒たちは通学の範囲が広いため，様々な交通機関を利用し通学している。その中で実際に怖い体験をした生徒たちもおり，自分の身の回りで起こった危険なことや起こりうることに対して，意識を向けることは，自分の身を守ることを指導していく上でとても重要であると考えた。普段あまり接することのない警察の方とふれあうことでより深く学ぶことができるのではないかと考えた。

本研究では，養護学級の生徒と警察の方々との交流活動を通して身の回りの安全について学習した実践をふり返りまとめてみたいと思う。

2　研究の経緯

本校では，生涯にわたり自分の生活を充実させ，創り上げていこうとする，「主体的に〔生きる力〕」をもった生徒を育成するための学習指導のあり方について研究してきた。一昨年度より「学びのコラボレーション」として，生徒相互が互いのよさを協働させながら「よりよく生きていく力」を育んでいくことを研究テーマとして取り組んできた。

養護学級独自の総合的な学習の時間の活動として，本校では従来から，地域や福祉施設のまつりへの参加・協力や，よさこい踊りの団体と連携しての地域行事への参加など，生徒の実態に応じて学習のねらいに迫ることができるような学習に取り組んできた。昨年度は国際交流員の方との活動の中でより広い社会や世界を意識した活動を取り入れた。

3　本年度研究

1．本年度の研究のポイント

本年は，一昨年度からのテーマである「学びのコラボレーション」という視点に，まとめの年度として評価という視点を加えた。

今年度の研究においては，「生徒相互のかかわりの中で，互いに認め合ったり励まし合ったりできる学習場面の設定」と「自己肯定感につながる自己評価のあり方とめあてのもたせ方」について取り組んできた。

4　本年度の研究

① 単元（総合的な学習）「警察の人と仲良くなろう！」　～気分スッキリ大作戦～
（指導者　浜崎真理子　　宮崎紀雅　　奈良井正）

② 生徒の実態と身につけさせたい資質

本学級は，男子６名，女子３名，計９名の生徒で構成されている。活動場面においては見通しをもって考えを出しながら進んで取り組む生徒や，活動自体を楽しみながら取り組む生徒，自分の課題を最後まですることを目標に取り組む生徒等，発達段階はさまざまである。

総合的な学習の時間では，生徒の実態から活動によってはグループに分かれて学習を行っている。

本単元では人とかかわりながら課題解決をしたり，自己評価や相互評価をくり返して自分自身をふり返ったりする経験によって，生徒一人ひとりに次のような資質が身についていくことを願っている。

本学級の生徒の中には社会的な出来事に関心をもち，進んで新聞やテレビなどを見たり，普段の会話でも社会的な出来事を話題にする生徒もいる。最近の社会的な現象として児童・生徒が対象となっている事件が頻繁に報道され，市内でも不審者の情報が頻繁に聞かれるようになってきた。こうした社会的状況の中，本校の生徒たちはかなり広範囲から通学しており，毎日公共の交通機関を利用し通学しているという実態がある。養護学級の生徒にも公共の交通機関を利用して通学している生徒がおり，生徒の中には不安感を強く抱いている生徒もいる。実際に通学や日常の生活の中で怖いと思った経験をしたことのある生徒もいる。また，そのような場面に出会った時にどうしてよいかわからなくて不安な気持ちを抱えているケースもあった。一方で，本学級の生徒の中には危険なことに対してあまり関心がない生徒もいる。

このように生徒の実態には大きな差があるが，生徒の実態に応じ自分の身の周りで起こりうる危険なことに注意を払ったり，対応の仕方について関心をもってほしいと願っている。そして，危機的なことに遭遇した場合に自分でできる対応の仕方を知っていたり，実際に行動に移すことができることは，将来に生かすことのできる力の一つだと考えている。

共生 協働	＊コミュニケーション能力	指示を理解する，わからないことを尋ねる，要求や考えを伝える，相手にわかりやすい伝え方を工夫する
	＊他とともに創造する力	自分にできることを選択する，できないことは助けをかりてする
問題 解決	＊問題を見つける力	興味を持つ，疑問を持つ，問題を選択する
	＊思いや願いを粘り強く実現する力	頼らない，やりぬく，こだわる，新しい目標を持つ，何をすべきか考えながら行動する
自分 づくり	＊自己を振り返る力	よさに気づく，次にしたいことを考える，自信を持つ
	＊感じる力と心	一緒に楽しむ，感動する，共感する

③ 単元の構想

本単元では，次のことを中心に学習を展開していく。

ア　交流活動を通して，自分たちのことをより知ってもらったり，警察官の方と親しくなる学習
イ　身の周りの危機に対して自分ができることは何かを調べる学習
ウ　調べたことをしおりにして家の人や身の周りの人に情報を発信する学習

活動の中で自分たちのしたことを認めてもらいながら次の活動への意欲を高めたり，成果を発表会の形で情報発信することで自己有用感を抱くことができるようにしていく。この単元で経験した，自

分の身を守るための知識や技能が，今後の学習活動や日常生活の中での主体的な態度につながっていくことを願っている。生徒たちは１学期に，県警察本部の見学や地域の交番への訪問，見学を経験している。警察に対してはまだ不安感や警戒心を強く抱いている生徒も多い。単元を通して，生徒の内面に寄り添い，自分のことを助けてもらえる存在としての警察への認識を深めたり，他の支援してもらえる機関などへの関心を高めたりすることで自立への意識を高めていくことを願っている。学習過程は，生徒たちの学習意識の高まりと課題の追求過程を考慮して次のように設定する。それぞれの段階で，生徒一人ひとりの活動過程と内面（情意面）を大切にしたかかわりをしていきたい。

ふれる＊現状認識→つかむ＊課題把握→むかう＊課題追求→広げる＊情報発信→生かす＊生活実践

④　学習意識の高まりを実感できる評価活動の工夫

特別支援教育における評価活動とは

自分の活動や成長をふり返り，自分の成長を実感できることが次の活動や生活への意欲につながると考えている。また，集団の中で自分の果たしてきた役割を具体的に知ったり，友だちや教師に認められたりすることが自分の存在価値の実感につながると考えている。

特別支援教育においては，生徒たちが自分だけの力で評価していく活動と，教師が成長を具体的にわかりやすく示していく活動を併用して工夫していくことが支援として重要である。生徒の自己評価は，記号化や数値化により生徒が自分の成長を捉えやすい工夫をする。教師の提示の仕方は，写真やＶＴＲによる視覚化，実演による体験化を考えている。

⑤　評価活動の工夫

ア　自己評価

○　自己観察のための「学習のしおり」の活用（生徒自身の評価）

・学習計画を記入したり，学習を振り返ったりするカードを作成する。ファイルに綴じていくことで自分の成長を振り返ることもできるようにする。一人ひとりの実態に応じて，視覚的な手立てを活用する。

○　見取りと手立てのための「個人記録表」の活用（教師と共に行う評価）

・生徒たちの学習中の「困り感（つまずき）」を観察やビデオ撮影により記録していく。場面ごとの適切な支援のあり方を記入する。困り感を克服した生徒の成長を具体的に伝え，自己評価力を高めていく。

イ　相互評価

○　ふり返り場面での話し合い活動の活用（生徒自身の評価）

・学習後にふり返りの場を設定する。友だちのよさや自分の活動に取り入れたいことを発表し合うことによって，次の時間へとつなげていきたい。学習前にもＶＴＲによってお互いのよさを確認し合いたい。

○　学習過程や集団の高まりを実感する掲示の活用（教師からの評価）

・学習の足跡を模造紙にまとめて教室内に掲示していく。活動の様子を写真によってふり返ったり，話し合いの過程を具体的に記述していくことで集団としての高まりを実感できるようにしていきたい。

⑥　単元目標

○　自分たちが困ったときにどうすればよいかという課題を友だちと一緒に解決していく満足感を味わいながら活動することができる。【共生・協働】

○　情報を収集・発信したり，創作活動をしたりしながら自分や学級全員でできることを考えることができる。【問題解決】

○　友だちや警察の人の話を聞いて，自分たちの活動のよさや頑張りをふり返ったりしながら，よりよい活動をめざしていくことができる。【自分づくり】

⑦　単元で期待する生徒の姿

内容	体験	単元で期待する生徒の姿		
		共生・協働	問題解決	自分づくり
ふれる	・危機回避すべきことについて様々な事象を思い浮かべたり，知ったりする。	・これまでに困ったことや，危ないと思ったことについて考えることができる。	・現時点でどうしたらよいか考えようとする。	・経験をもとにして自分なりに考える。 ・本やインターネットなど自分が使える手段を活用する。
つかむ	・警察の仕事について調べたり，警察の人に聞いてみたいことを見つける。	・分からないところを友だちと一緒に整理する。	・自分が質問をしてみたいことを考えようとする。	・思い切って自分から進んでかかわろうとする。
むかう	・警察の人は自分たちを助けてくれる存在であることを学ぶ。	・警察の人と仲良くなろうと，積極的に参加する。	・自分からわからないことを質問しようとする。	・教わったことを自分なりに受け止め，生活の中で気をつけようとする。
広げる	・今まで学習してきたことを伝え合う。 ・自分たちが作ったしおりを警察の人に見てもらう。	・話し合ったりお互いに協力したりしながら安全のしおりを完成させる。	・自分の役割を自覚して，責任をもって取り組もうとする。	・自分や友だちの良いところに気づき評価しようとする。
生かす	・家の人に伝えたり，他の学校の人にも紹介する。	・身の周りの出来事に関心をもち，積極的にかかわろうとする。	・何か困ったことがあったときに自分でできそうなことを探したり人に連絡をしようとしたりする。	・警察の人に親しみを感じたり，警察の人に感謝しようとする。

学習計画（全20時間）

段階		学習活動	指導上の留意点	時数
流れ	追求の過程			
ふれる	問題把握 自分のやりたい活動内容を選ぶ。活動の目標やめあてを決める。	困ったときにどうすればよいか調べよう ・困ったときにどうすればよいか考えてみよう。 ・自分ができそうなことを見つけてみよう。	・生徒からの考えがでないときは，教師が考えを出したり，選択肢を与えたりして話し合いを進めていくことができるようにする。活動計画を掲示し，見通しがもちやすいようにする。	4

つかむ	現状認識 自分のよさや関心を認識し学習意欲を高める。	調べてみて分からないことを整理してみよう ・調べたことを模造紙にまとめる。	・自分から警察の人と仲良くなろうと働きかけていくことができるように生徒の待つ構えを大切にする。	4
むかう	問題追求 活動内容を計画する。問題を解決していく。	警察の人と仲良しになろう ・警察の人と交流会をする。 ・警察の人は自分たちが困った時に助けてくれる人たちだということを知る。	・考えたり，調べたりしたことを警察の人に聞いてもらったり，分からなかったことを質問をする。 ・活動の経過を掲示し，ふり返ることができるようにする。	8
広げる	情報発信 できたことや願いを他者に伝える。	調べたことをまとめて安全のしおりをつくろう ・今まで学習してきたことを伝え合う。 ・自分の成長やがんばりをふり返る。	・警察の人と一緒に，活動の成果をふり返ることができるようにする。 ・掲示や作成した物をふり返ったり，評価し合うことで自分の成長を実感する。	2
生かす	生活実践 課題解決したことを生活の中へも広げていく。	できたことを家の人や他の学校の人に伝えよう ・安全のしおりを家の人に紹介しながら，自分ができそうなことを家の人に伝える。	・家の人に自分が作成した安全のしおりを見せたり，紹介したりしながら，身の周りの危険なことに気をつけられるようにする。	2

※授業研究の視点

○生徒の問題解決や成長の過程，つまずきを的確に把握するための【見取り】は適切であったか。

○【見取り】に対して的確な助言や共感的な言葉がけ，他者とのかかわりあい，支援ツールの活用などの【手立て】は効果的であったか。

○ふり返りファイルを用いた自己評価活動や，友だちのよさを発表し合う相互評価活動の場は，生徒の意欲を高めるために効果的であったか。

これらの視点に沿って授業をふり返りたい。

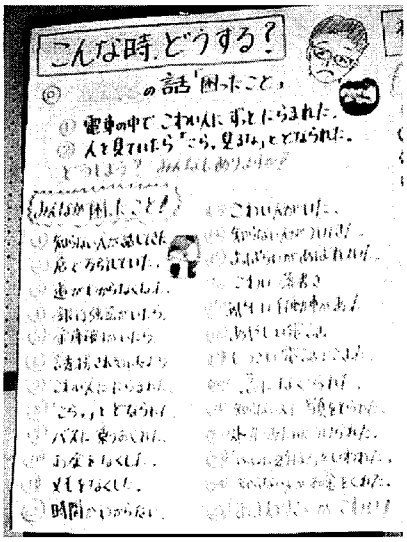
（1）警察の方との出会いの会より　～【見取り】と【手立て】の視点から～

この単元は一人の生徒の声からスタートした。昼食時の生徒との会話の中で「電車の中でにらまれたり，怒鳴られたりして怖かった。どうすればよいかわからなかった。」というある生徒の声から次々と他の生徒たちも自らの経験を話し始め，それまでに聞いたことがなかったような事実まで出てきた。そして生徒たちが怖いと感じることが実際に生徒の身の周りで起きていることを改めて感じさせられた。そこで，これらの生活経験から出てきた問題に対して，自分たちで話し合って解決できたり，誰かに相談したりしながら解決していくことができる力を育てていくよい機会であると考えた。

導入の時間に出てきた生徒の話をまとめてみると模造紙にいっぱいになるほど出てきた。（写真1）そして，こんな時はどうしたらよいだろうかということで，まず自分たちで対応を考えて

みることにした。生徒の中にはことばだけではイメージしにくい生徒もいるので，実際に教員が演技をしてみて，その場の状況を再現しながら考えさせたり，生徒同士で意見を出し合ったりしながらまとめていった。その中で生徒だけの考えでは解決できない問題もあったので，解決しなかったものについては警察の方に教えてもらおうということになった。

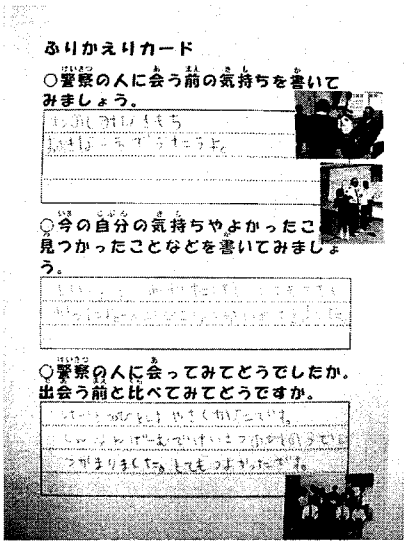
（写真１　生徒から出た意見）



警察の中にはサマーキャンプで夏休みのボランティア活動に参加している方もおられ，生徒の中には出会っている生徒がいたり，１学期には養護学級の学習の一環として県の警察署や派出所へ見学に行ったりしている。しかし，その時の様子を見ていると，生徒の中には警察ということばを耳にしただけでとても緊張してしまう生徒もいるという実態があった。質問をためらったり，パトカーに乗ってみないかと誘われて，動きが止まってしまったりする生徒がいた。このことから警察のことを知りたいと思っている，あるいは興味があるが，制服を見ると緊張してしまったり，お巡りさんということばからくる自分なりのイメージから緊張してしまうのではないかと考えた。

Ａ子は，警察の人に会う前は「おまわりさんが怖いです。知らない人もこわいです。」という表現をしていた。そのことばからは何かの怖かった経験から出てきたことばではなくて，警察の人は犯人を捕まえたり交通違反の取締りをして違反した人に注意するので，警察の人はみんなとっても怖い人だという彼女なりのイメージをもっているのではないかと考えた。そこで，生徒たちに相談をして警察の方との出会いの会を計画した。警察の人と仲良しになることを，大きな目標にかかげ，自分たちで出会いの会の楽しい内容を考えることにした。一緒に楽しい経験をすることで，不安な気持ちが和らいでいくのではないかと考えた。緊張せずに話をすることができたり，接することができるようになれば，何かあった時に警察の方に助けてもらうこともできるのではないかと考えた。また，地域の警察の方にも生徒のことを実際にふれあう中で実態をよく知ってもらうことも大切ではないかと考えた。

（写真２　Ａ子のふり返りカード）



当日のふり返りカードにＡ子は「たのしみな気持ち」「大きな声でうたうよ」と警察の人に会う前の気持ちを書いている。（写真２）警察の人との出会いの会では，最初の自己紹介の後，自分の方から握手をすることができ，ゲームの時にはすっかり慣れてきて，警察の人にしがみつくまでに親近感をもつようになった。その時のことをふり返りカードの中にも「新聞ゲームで警察の人のうでにつかまりました。とてもつよかったです。」という感想を書いている。

（２）評価活動について

本年度の研究のポイントとして評価活動について取り上げている。生徒が自分で評価をするため，あるいは生徒同士で評価し合うような活動を行うに当たり，授業内容がわかりやすいものでないと評価についてもやりにくさが出てくると思われる。そこで，生徒にとって授業の流れや課題がとらえやすくするために構造化をする必要があると感じた。

①自己評価活動の取り組み

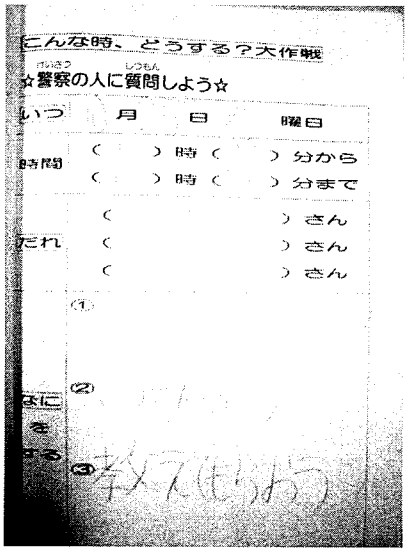
自分の取り組みをふり返り，それを何らかの形で表現するということは，養護学級の生徒の実態としては難しい部分もあると思われるが，それを視覚的に示すことで，自分の気持ちが今どん

な状態にあるのかを素直に表すことができたと感じている。自分の気持ちをグラフの位置で表しある程度客観的にとらえることができたり，気持ちの変化を整理して示すことができた。また１時間１時間のめあてをしっかりもたせることで，ふり返る時にもポイントを絞って自分を見ることができたと感じている。

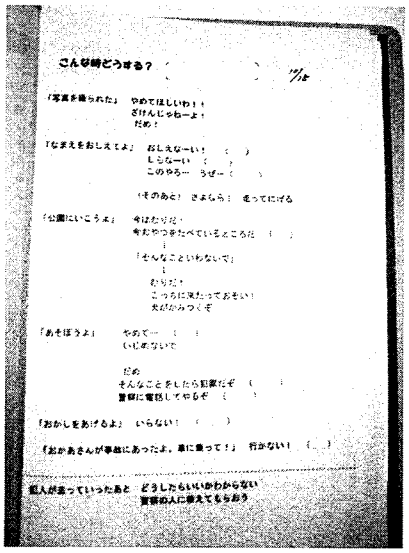
・自己観察のための「学習のしおり」などの活用

（生徒自身の評価）生徒自身が学習のふり返りをできるように「学習のしおり」ファイルを一人ひとりに持たせることにした。学習の流れやめあてや話し合ってわかったことなどを記入していった。これにより生徒が学習の流れを良く理解でき，次の学習への意欲を高めることができた。

（写真３　学習のしおりより一部抜粋）



（写真４　授業記録より一部抜粋）



（教師と共に行う評価）授業の様子を観察記録やビデオにとり，特に生徒の「困り感」を把握し，適切な支援をできるように教師が「見取り」と「手だて」を行うための記録表を作成した。これについてはメモ程度の簡単なものであったが，生徒に対する支援の内容についてはとらえやすいものであった。そしてこれをもとに次の授業の中で生徒の成長を具体的に伝えることができた。

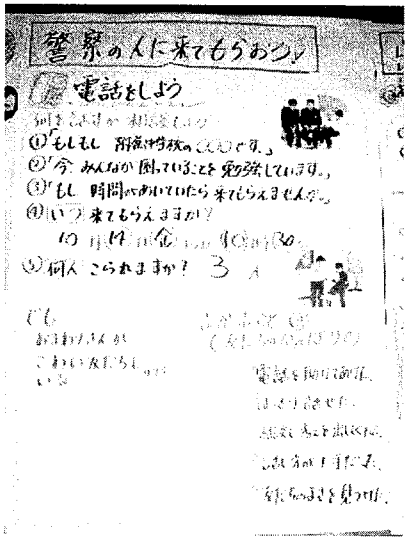
②相互評価活動の取り組み

・ふり返り場面での話し合いの活用（生徒自身の評価）

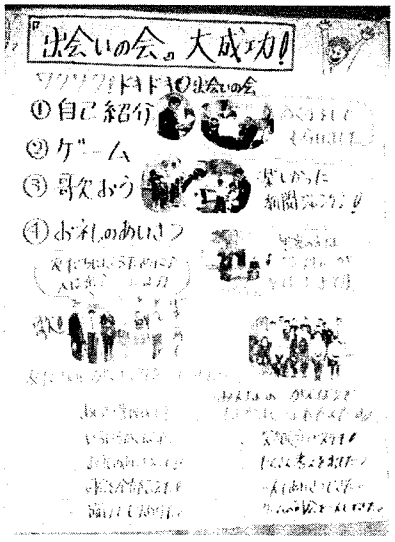
授業の始まり，あるいは終わりのところでめあてを確認しながら，お互いのよいところを見つけ合うためのふり返りの場を設定した。学習場面によって全体でよかったことや個人のがんばりなどに目を向けさせ，個人の成長や集団の高まりを感じ取れるよう配慮した。（写真５，６，７）

（相互評価について学習過程の掲示の中に取り入れ掲示した）

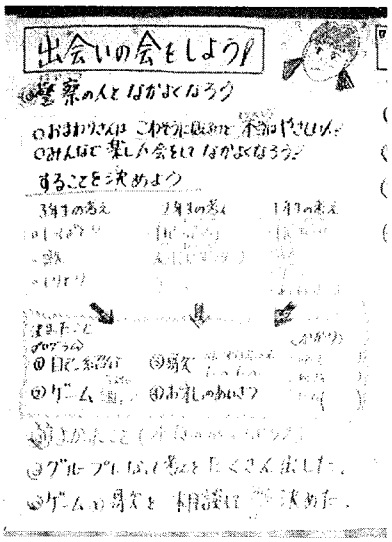
（写真５）



（写真６）

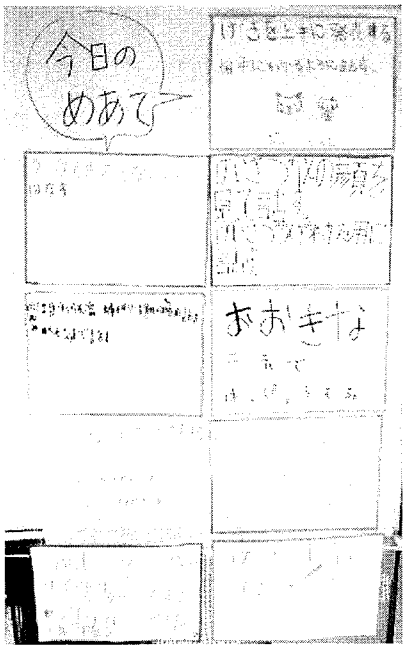


（写真７）

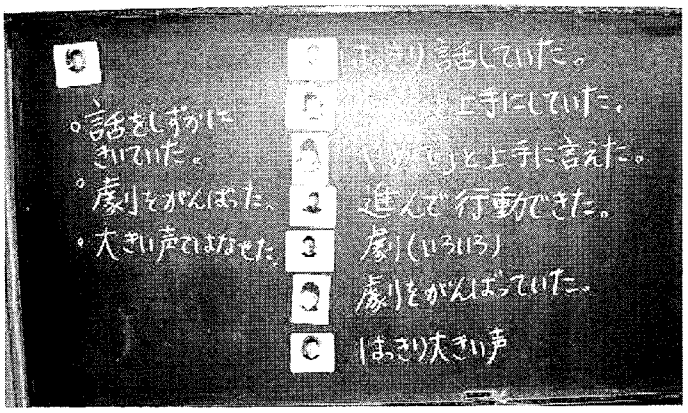


また，生徒同士でのふり返りをする際，友だちのどんなところに着目してふり返ったらよいのかということについてわかりやすくするためにも，一人ひとりの学習のめあてについてできるだけ具体的にもたせることにした。それをもとにしながらふり返ることができた（写真８，９）

（写真８　学習のめあて）



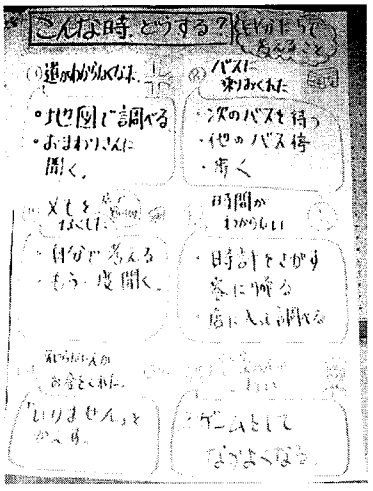
（写真９　ふり返りの場面での生徒の意見）

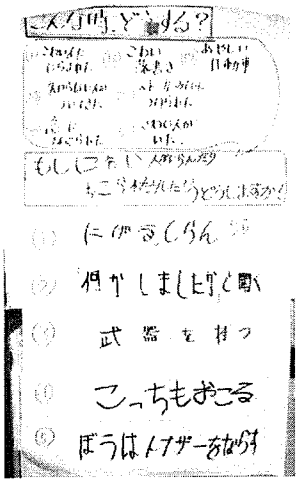


学習過程や集団の高まりを実感する掲示の活用（教師からの評価）

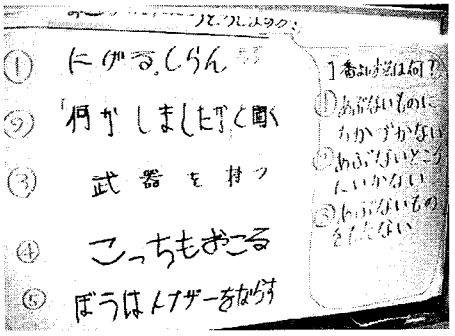
授業が終わった後，生徒の意見や考えをまとめ，整理し直し色分けをしたり罫線で囲ったりして構造化をして生徒にとらえ易いようにした。生徒たちは掲示を見ながら，授業で自分が言ったことやしたことについてふり返ることができた。自分の過去の掲示から新たな考えを思いついたり，友だちの考えについて思い起こすこともできた。（写真10，11，12）

（写真10，11　生徒の意見を整理したもの）





（写真12　学習の過程で追加された掲示部分）

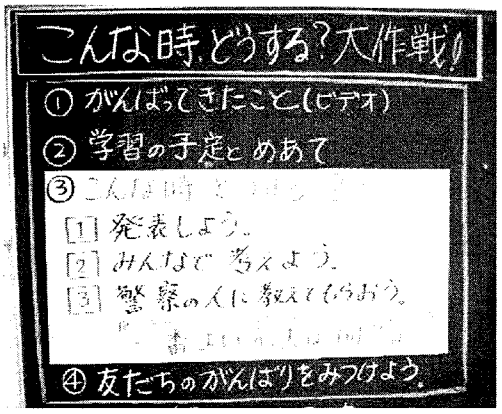


・掲示物の構造化

授業ではいつも本時の課題（何について勉強するのか），活動内容（どんなことをするのか），学習のめあて（どんなふうに勉強するのか）を枠で囲んでわかりやすく示した。このようにすることで，生徒も学習に集中しやすくなり，課題意識も高まってきた。また何について質問された

り，考えればよいかがあらかじめ予想できる生徒は，自分から発言するような姿がたくさん見られた。授業の中で今どこのことをやっているのか確認しながら進めることで次にやることやわかったことの確認ができたと思われる。

（写真13　学習の流れ）



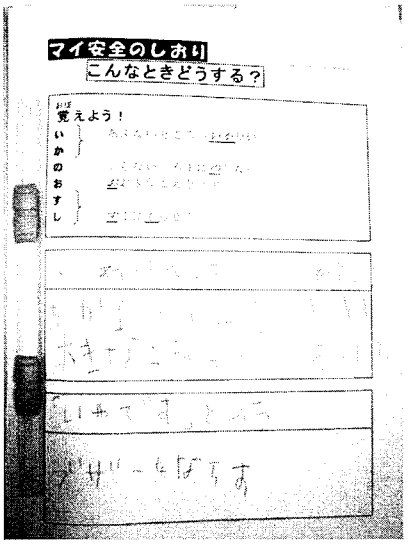
5　研究の成果と今後の課題

養護学級でも自分の身を守ることについての学習を通して，コミュニケーションの力の大切さを痛感した。必要な時に人にどう伝えるか，その方法は生徒の実態によって様々であるが，自分は伝えているつもりでも相手に確実に伝わっていないこともある。生徒たちは警察の人に対して最初は緊張していたり恐れていたりしたが，学習の中で伝えたいことを正しく伝えようとする姿が見られるようになった。また，警察の方の話をしっかり聞いて自分が危険な目にあった時にどう対応すればいいのか，真剣に聞こうとする姿も見られた。自分なりの方法で解決しようとする考えから，警察の方の話を聞いて，よりよい対応の仕方に考え方が変化していった。また，ふり返りや他の生徒の良いところを見つけるなど，自己評価や相互評価などの仕方を工夫することによって，生徒同士のかかわりの中で自己を高めていこうとする姿が見られた。

学習のまとめとして自分の家族だけでなく他の学校などへも情報発信をしていきたいという願いもあったが，生徒の実態から一人ひとりの「安全のしおり」を作成し，家の人と身の周りの安全について話し合ったり，再確認したりすることにとどまってしまった点は残念であったが，生徒にとっては学習後にも自分の対応の仕方を確認するものとして役立っていることは収穫であった。

地域の警察の方に入って頂くことで，生徒は警察の人たちが自分たちの身を守ってくれる存在であることが体験を通して感じられたと思う。何かあった時に警察の人に相談したり連絡をしたりする勇気なり自信につながった学習になったといえる。これらのことは将来において社会の中で「生かすことのできる力」を育むことにつながっていくものと思われる。

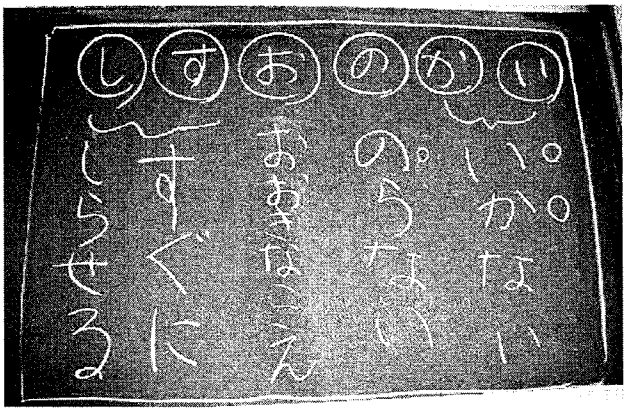
（写真14　情報発信のための学習のまとめ）



おわりに

この活動を通して生徒は身の周りに起こりうる危機に対して，自覚したり再認識できたりとても有意義な活動になったと思う。また我々教員にとっても地域との連携，保護者との連携の大切さを改めて感じさせられた活動であった。何よりも快くご協力をいただいた警察の方々には大変感謝をしている。初めは警察の人が怖いと言っていた生徒も，警察の方がとても自然に接して頂いて恐怖心が解けてとても和やかなよい雰囲気の中で活動することができた。そして，警察の方の話をしっ

（写真15　防犯のキャッチフレーズ）



かり聞くこともできた。学習が終わってからも警察の方に教えて頂いた「いかのおすし」というフレーズを覚えていて，「知らない人に連れていかれそうになったら，いかのおすしだね。」と帰りの時に確認してくる生徒もいる。生徒にとって普段の生活の中に生かせるとてもよい学習になったと思う。また，この学習を機会に，電話を使って家に連絡をしたり，家から学校へ遅刻することを自分で電話を伝えることができたりするなど，思わぬところで学習の成果が現れるという出来事もあった。

今後も，このような安全意識や危機に対する回避行動など具体的な場面を通して指導を継続していくと共に，より地域との連携を深めながら生徒の学習を深めていきたいと考えている。

【参考文献】

・島根大学教育学部附属中学校『[生きる力] を育む学びのコラボレーション』
(2003. 6 月) pp133-142
・島根大学教育学部附属中学校『研究紀要第47号』(2005. 3 月) pp57-72

(はまさき まりこ 特別支援教育 hamasaki@edu.shimane-u.ac.jp)
(ならい ただし 特別支援教育 tadashi-n@edu.shimane.ac.jp)
(みやざき のりまさ 特別支援教育 miyazaki@edu.shimane-u.ac.jp)